

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
（毎月）一回・十五日發行

（通第五十六号）

慈光

第五卷

第十一號

目次

| | |
|---------------------------|--|
| 常音先生隨聞私記……………花田正夫……………（1） | |
| 大經四十八願講話……………福島政雄……………（7） | |
| あゆみの跡……………臼杵祖山……………（10） | |

常音先生隨聞私記

花田正夫

折にふれての御法語

○ どのどこまでも御慈悲といふことは、私がどのどこまでもどうにもならぬといふことである。

○ いくら解らなくても、解るまでついて離れぬ方があつて下されば、私が解る必要はないではないか。

○ 私が不眞面目であればあるだけ眞面目になつて下さる。

○ 病氣がなほつてみたところで、そんなことは小さな事と言ふ様な殊勝な心になれる人間ぢやない。病氣になればなほりたうてなほりたうて無茶苦茶になるのぢや。わしは無茶苦茶ですよ。その無茶苦茶になる奴を可哀相と思し召して下さるお慈悲である。

○ 信仰に入ればニコニコと麗はしい日が送れると思つてゐるがさうでない。信仰に入つても入らなくても凡夫だ。そ

○ 誰にも見捨てられる人間だからこそ佛様が御見捨てないのだ。

○ 捨てないのが佛様です。

○ 捨てない、それだけです。

○ その佛様に骨を拾うて貰ふのです。

○ お前の思つてゐる佛様は佛智不思議ではない。よくなれぬといふことを御存じの佛が、よくならねばならぬとは言はれぬ。よくなれぬのが可哀相と思つて下さる、それは道理にあはぬ。そこが佛智の不思議である。

○ 出来損ひが話を聞いて解つたら出来損ひでない様になるのではない。話を聞いて出来損ひがなほるやうなら、今まで出来損ひでは居らぬ。

○ どうにもならぬ出来損ひのものを、出来損ひだからとて、どこまでも可哀相と思つてお見捨てのない御眞実である。

○ お慈悲では氣に入らぬ。立派な信心をこしらへ上げた、それが我慢である、剛情である。その我慢のやまぬ奴なればこそ、どのどこまでもお相手下さるのがお慈悲である。

○ 見込みのない奴だから、お慈悲だけが、どのどこまでも

れを目あてのお慈悲ですよ。

○ 自分の心に信心をつくらうと苦心してばかり居る、その様な奴を可哀相と思つて下さる。

○ 片輪性の私をお見捨てない御眞実である。三尺の蛇はど云うて見ても三尺の蛇である。その三尺の蛇が長虫長虫と云うて世間から嫌はれるから、すこしは短かうならぬものかと、どぐろを巻いて見ても、鎌首をあけて見ても一分一厘どうにもなるものではない。そのどうして見やうもない片輪性の、蛇性の私だからお見捨てないのである。

○ 間違はぬ様になれるのではない。間違だらけの私をどのどこまでもお呆れのない御眞実である。

○ ああならねば、こうならねばといふことを佛様の方につけてはならぬ。それは自分が勝手に思ふことですよ。

○ おあきれない。

○ 誰れも相手になつてくれぬ氣違ひだから、そこを憐んで御同情して下さい。

○ わたしは兄貴が信心頂け／＼と言つて居るやうに、長い間聞き間違つてゐた。さうではなかつた、信じられぬ者を信心頂けた者と同様に思ふぞ、すこしも隔てぬぞと言ふ心でありましたのや。へだてたのはこちらでした。

○ 歎異抄の九章で、唯圓房が、よろこぶべきことがよろこべぬと聖人に訴へてゐるが、わたしは、よろこぶべきことどころでない、悲しむべきことさへ悲しむことが出来ぬ奴です。

○ 正信偈の釈迦章の終りが「彌陀佛の本願念佛は、邪見、憍慢の惡業生、信樂を受持すること甚だもつて難し、難の中の難、これに過ぎたるは無し」と結んである。普通はあそこできつて次の七高僧方の御教を説くのであるが、さうではない。

○ 「難中の難、これに過ぎたるは無し」と嚴父の釈尊のお叱りがあつて、次に悲母として、大聖の正意を身にうけられての七祖の御出現がある。

わたしの住む家を忘れてゐた

K市の呉服屋に一人娘として育つた人があつた。御養子を迎へ、二人の子供も生れ、その後両親は死なれたけれど商売も繁昌して何一つ云ふこともない生活であつた。

ところが隔月に北海道と樺太方面に商用で出張してゐた主人が、今迄と變つて急に優しくするやうになり、旅から帰ると樺太の土産ぢや、北海道の土産ぢやと云うて何かと氣をつけてくれる。妙ぢや／＼と思つてゐるうちに、主人は何か祕密を持つてゐる、何処かかくしてゐて打ちとけぬところがあるのに氣がついて、早速興信所に頼んで調査して見たら、北海道にかくし女が出来てゐて、最近子供まで生れたといふことであつた。

勝氣な奥さんで、それを知るなり、旅から歸つた主人に「もう歸つてもらはなくてもよい、子までも出来てゐるさうであるから北海道に行きなさい」と主人に言ひ渡し、「子供二人は女手ながら私一人で育てます」といつた具合で、それから店を独りで切り盛りして、何年か苦勞を続けた甲斐があつて、子供さん二人を大学まで卒業させ、また夫々就職出来、二人とも嫁をもらつて独立するやうになつた。

そこでほつと一息ついた奥さんにして見れば、これで立派に親のつとめも果したから、これからは子供達の家を行

き来したり、旅行などとして氣樂に生涯を終わりたいと思つた。ところが世の中はさううまくいかない。勝氣でしつかり者、独りで商売を長く切りまくつた様な人であるから、家の嫁共のすることなすことが、一氣に喰はない。そこでやかましく、手きびしく叱ると言う風であつたので、二人の嫁は姑さんをけむたがつて、表面はおだやかにしてゐて、内心に敬遠するといふ始末になつた。

さあ、さう云ふことに突きあたつて奥さんは始めて「三界に家なし」という句を思ひ出して、自分は今迄ただ子供達の家、独立した家を願うて來たが、自分の住む家を忘れて居つた、これは大變である、といふことになつて、お釈迦様が「三界に家なし」と訓へられたのであるから、佛教にしたがへば眞実の自分の家が見つかるに相違あるまい、と早速佛道は何をおいても求めねばならぬと決心した。

そこで佛教の中何宗を求めたらよいか、生家は眞宗の盛んなK市であるが、お慈悲とか、おたすけといふのはどうも自分の氣性にあはぬ。自分はひとつ禪門を叩いて女ながらも坐禅して悟りをひらきたいと思ひ立つて、それから三年程、鎌倉の有名な禪寺に通つた。

ところが岩の上にも三年と云ふが、さうかうしてゐるうちに相手の心も解るものである。導いてやらうといふ御師家さんもほんたうはまだ悟つてゐないといふことが知れた

ので、遂にそこを離れて了うて、それから、時に日蓮宗に入つて寒中に滝に打たれたり、時に眞言宗の門を叩いて加持祈禱に身をやつし、八家九宗を遍歴したが、何時まで経つても、依然もとの默阿彌であつた。

そのうちにとうとう思ひついたのが、自分の家の宗旨も眞宗である、今迄軽く思つてゐたが、立派な僧侶も居られるかも知れぬ。ひとつその方を求めて徹底的に聞いて見ようとなつた。ところが不思議にも二、三の人々から求道會館を教へられ、兄貴を訪ねて來たのです。

そこで會館の日曜講話に、奥さんは始めて門をくぐつたのです。その時一番前の座席に坐つて一心に耳を傾けた時開口一番、兄貴の講話は「世の中で、何がわるい、彼がわるいといふなれど、自分を立派な玉のやうに心得て、自分は立派であるが、ひとが悪いと思ひこんでゐるのが一番おそろしいことである。すべて吾々は五分と五分である。共にこれ凡夫のみである」

と淳々と説いて行つた。これを始めて聞いた奥さんは、自分は今迄自分がよい主人はけしからぬ、嫁がボンヤリでいかぬ、等々とやつて來た。今も今とて、自分ほど眞剣に道を求めてゐる人はあるまいと、他の人を見くだして、一番前席に豪然と坐つてゐる。ところがこれが一番邪見であつた、慢心であつた。先生はこの私を見抜かれてのお話で

あらうかと一矢奥さんの心中深く徹するものがあつた。

それから日曜毎に聞法に來るが、今迄とは打つて交つて、愧づかしくなり、一番後方の座席に、顔もあけ得ないで聽聞するやうになつた。

或日、兄貴がその奥さんを喚んで、どういふ氣持で聞いて居るか尋ねると

「わたしはここへ來るまでは自分がよいといふひとつでやらせて貰うて居りましたが、今ではそれが邪見であり獨善であり慢心であると知らされて、苦しうて／＼堪えられなくなりました。家に居りまして息子がいかに、嫁がわるいと思ふにつけ、さう思ふ自分自身はとふりかへりますと、何も云へなくなり、胸の内は苦しうて／＼今では生きてゐることさへ苦しいのであります」といふことであつた。

そこで兄貴が申しますには「自分がよいとあんたが始めに思ひ込んでゐたのが橋慢であり邪見である。更に自分がわるい、こまつた／＼と苦しんでゐるのが卑屈である、卑下慢である。自分はわるい、つまらぬ、困つた奴と云へばいかにも謙遜のやうであるが、その実まだ／＼自分自身に大いに頼むところを持つてゐる。口では悪い／＼と云ひながら、すこしは立派な者になれよう、さうなれぬから困つたといふのであるから、未來善人になれるといふ慢心があ

るのだ。過去も駄目、現在も駄目な者が、どうして未来によくなれるといふことがあり得ようか。それなのに未来の善人といふ美しい夢を追うて、溺れる者が葉をつかむやうに、それにしがみついてゐる、そこに卑屈の姿がある。我慢の強い我々は何時かはよくなれると何処までも夢を追うてやまぬが、それは矢張り夢である。現実は一分一厘どうすることも出来ないのが事実で、これからさきもそれより外はない。その地獄一定の身を見てとつて、その者に無限の御同情下さる、憐んで下さるのが佛の大悲である」と種々と解いてをりますうちに、不思議にもその奥さんの心がひらけて、卑屈の泥沼から信心の華がほころびて、自分の真実の家は阿彌陀佛のふところであつた、御理解のある久遠の親様が佛でましましたと氣付いたのであつた。それからは何時も会館のまん中に坐つて、いかにもその通りといふやうに満足して閑法してゐる。

それはN君が可哀相である

Nさんは青年の頃は基督教の野外伝道を聞き、聖書に非常に感激して、それから聖書を肌身から離されぬやうになつた。一時は自分も牧師になつて福音の伝導に専念しようかとも思つたさうだが、家業も捨てられないから、そのことは思いあきらめて、実業家として世に立ち、その収入の半分は年々教團に献金を續けて六十歳になつた。

それからはずつたりと病床に伏してしひ、今迄持つてゐた信念がすつかり崩れてしまひ、然も大小便も覚えぬといふひどい状態になつた。さうした大暗黒の中で光を求め、病苦の最中にも聖書を離さず、泣きの涙で聖書を読むといふ状態でのつた。

ところが、求道会館の同朋で洗張業の浅井君が、Nさんの邸に仕事の都合で立ち寄ると、奥さんが

「まあ浅井さん聞いて下さい。主人は六十の今日まで、右手に聖書が高く掲げて、模範の信者として来ましたが、最近になつて、自分は間違つてゐた、すまぬことをしたといふやうになり、大煩悶におち、大小便も覚えぬといふ始末、今日も今日とてその後始末をしなばかりです云々」とありつたけの愚痴を打ち明けたのである。

これを聞いた浅井君は、その足で会館に飛んで来て、一部始終を兄貴に物語りました。これをチツト聞いてゐた兄貴が、両眼に一杯の涙を浮べて

「それはN君が可哀相である。永年こればかりはと信じ、たよつた基督の信仰が崩れ、その上に一番地上の理解者である奥さんからまで愛想をつかされては、N君の心中は血の涙であらう。如何にも氣の毒である」と、兄貴は自身の大煩悶の當時を思ひ浮べて思はずつばやいたのである。

ところが浅井君はその足で再びNさんの家を訪ひ、奥さんに「実は近角先生がカク／＼云はれました」と告げると奥の間で臥して居たNさんが、襖を二、三寸開けて、

「近角さんがわしのことを聞いて、涙を浮べて、わしが

それまではごく單純に考へ、教團に献金するのであるから自分は善行を積んでゐるとひとり決めて居つたが、色々六十年の生活をかへり見ると「自分が年々献金するので、教團関係の人々が自分の家に常に出入するが、その人達が私の嫌嫌取りをする、さう云う食根性があらはに見られる。これでは献金することによつて多くの人々を悪魔の手に渡してゐる。自分は長年何故さうしたことに氣付かなかつたであらうか、大変な間違ひをして自己満足をしてゐた」さういふことに目が覺めて来た。

その当時N氏は非常に内村鑑三氏を尊敬してゐて「日本中で内村牧師ほどの徹底した基督教者は居らぬ。自分は今となつて誰も信頼出来ぬが内村牧師ばかりは真実の信者であらう」といふので、或る日牧師を訪ねた。

ところがすでに内村牧師は再起不能といふ重病の床について居られたので、Nさんは特別の許しをうけて枕頭に寄り添うて、自分の苦衷を訴へ、かつは

「先生。私は先生程の信者は日本に二人と居ない。先生こそ無二の信者と信じて居りますが、今回は先生もいよいよ御大病で、死もお近いと承りますが、先生程の大信者には、すでに天国のお迎への音楽が聞えるでせうか」と、ひどい話ではあるが、Nさんも一生懸命、溺れる者が葉をもつかむ心で、そこを突つこんで尋ねた。内村牧師は正直な人で、頭を左右に振つて「私にはまだ聞えません」と答へられて、淋しい顔をされた。

このことがNさんにとつて非常な精神的衝撃となつて、

可哀相と云つて下さつたか」と感銘深くつぶやいて、Nさんも両眼からホロ／＼と涙をこぼしたさうである。

其の後、數日たつて、浅井君がNさんの宅を再び訪れると奥さんが病室から飛んで来て

「浅井さん／＼世にも稀らしいことがあるものです。あなたが近角さんの話をして下さつてから主人の大小便がすつかり整ひ、今では念佛を申して居ります。そして浅井さんが来られたらすぐ会つて話したいことがあるとお待ちして居りました」

とのことであつた。そこで浅井君が病室に入ると

「浅井さん有難う。実はなあ、わしが可哀相と近角さんが涙を流して同情して下さつたと聞いて、何とも言へず胸をうたれた。そこで思ふのに、佛教信者の近角さんがこんなに温い心を持つてゐるのだから、佛教より數等すぐれてゐる、世界中に伝へられてゐる基督教には、もつと温い心があるに相違なからうと信じて、あれから何十回も聖書を繰り返して讀んだが、一向に見つかからない。どう／＼聖書を読み／＼南無阿彌陀佛／＼申さずに居られなくなり、佛の御眞実にとかれ、やすらがせて貰ひました。どうか近角先生にもくれ／＼もよろしく御礼を申上げて下さい」とよろこびにあふれる述懐であつた。

然し、Nさんの病氣はその後思はしくなく、とう／＼念佛往生の素懷を遂けられたのであるが、これが機縁となつて一家揃うて佛道を求められるやうになつた。これも兄貴が覺えず知らず涙にむせんで「N君が可哀相である」ともらしたことが佛智満入の一大動機になつたやうです。

大經四十八願講話

福 島 政 雄

大体、四十八願のこころをかいつまんで、一口づつ申しますと、これまでに述べたやうになります。そこで四十八願のうちで聖人がどの願とどの願を一番大切にされたかと云ふことについて申し上げます。

勿論第十八願が中心であります。次に第十九、第二十の願を加へて、例の三願をあげねばなりません。それに第十一願、第十二願、第十三願、第十七願、第二十二願、第三十三、四、五の願、そのあたりが聖人が大切に御覽になつた願であります。然しその中心は何と言つても第十八願でありますから、その心持で申し上げませう。さてこの願文を申します。

「設ひ我佛を得んに、十方の衆生、至心に信樂して我が国に生れんと欲し、乃至十念せん、若し生れずば、正覺を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんとなば除かん。」

第十八願を『至心信樂の願』と聖人が云つて居られます。この願に至心・信樂・欲生とありますのを、基督教の信・愛・望にあてはめて考へたこともあります。信とは信ずる、

望とは、ぞむ、愛は愛するといふ意味で、しつくり当るのではありませんが、信樂には信、欲生に望が相当してゐます、然し至心に愛が相当するかどうか、これはすこし問題であります。

眞宗の昔の御説師方は、至心は眞実である、信樂は智慧欲生は慈悲であると講釈せられて居ります。至心はまごころ、眞実心、そして信樂は、樂の字をけうと讀むときは願ふといふ意味で、信じ願ふことである。佛陀の智慧の光が照り、照された光に導かれて、次に佛の世界を願ふやうになります。欲生とは我々が生れようと願ふのでありますが、実は佛の心が我々にとほつて欲生心がおこるのであります。そこで信樂は佛の智慧の働きが我々に感じた趣であり、佛の慈悲を感じたのが欲生であります。至心は信樂と欲生とを包容してゐるのであります。さうでありますから至心・信樂・欲生と三つ分けてありますが、これは至心の一つにおさまるので、我々の受ける側からは一心であります。大經の下巻の始めに願成就文がありますが、そこでは唯一心といふことになるのであります。私共から云へ

ば一心帰命の一つであります。佛の心持をひらけば至心・信樂・欲生となるのであります。佛のまことの生命が私に徹して下さる、そこに私の心持に信樂のこころがひらかれる、その望は佛の智慧によるのであります。又私の心持に欲生のこころがひらかれる、そしてまことの国に生れたいと願ふ。それには生れさしてやりたいと云ふ佛の慈悲が根源にある。斯様にすべての根源が佛のまことにある、受ける方からは欲生心になるのであります。

天親菩薩の淨土論に「世尊、我一心に尽十方無碍光如来に帰命し奉り、安樂國に生れんと願す」といふ有名な言葉があります。この「我一心に」が、至心・信樂・欲生を一つにつめて我身に二心と味うて居られるのであります。

次に大經の下巻の悲化段、五惡段に「一心正念、端身正行」といふことを繰り返して説かれてゐるが、これは私共が一心正念になり、端身正行とつとめて行くのではなく、この一心を引きおこして下さる佛のまことが、至心・信樂・欲生の三つの趣となつて私にひびいて来る、そして一心帰命の心をよびおこして下さるのであります。

この第十八願に「十方衆生」と呼びかけられて、あらゆる衆生を漏らされることがない、そこに至心・信樂・欲生佛のまことと智慧と慈悲がひびいてくる、すると衆生に自然に「乃至十念、一念乃至十念」で、一声でも十声でも、

一生涯でも、佛のまことがひびいて、南無阿彌陀佛となへる、その時に十八願は成就されてゐるのであります。衆生の心に「彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなり」と信じて、念佛申さんと思ひたつこころのおこる「そこが乃至十念であります。さうなれば如何なる衆生も必ず生れる、若し生れずば正覺を取らじ」と誓はれてあります。四十八願の一つ一つに「正覺を取らじ」とはありますが、「若し生れずば」ば十八願のみにある、このことは昔の講者は大切に見て居られます。十方衆生、一切の衆生を必ず生れるやうにしたい、自分が正覺をとることと衆生が生れるといふことが同時のことであると誓はれてゐるのであります。

十八願の最後に「唯五逆と正法を誹謗する者を除かん」とあります。さてこのことについて種々と考へられるのであります。さて十八願は、十方衆生の如何なる者をも淨土に生れさせたいと誓はれてゐるのに、殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出佛身血の五つのひどい罪を犯す者や、正しい教をそしつた者は、これだけは取り除くとあります。

ここを昔の講者達はどう解釈して居られるかと申しますと、十八願の「若し生れずば正覺を取らじ」までは阿彌陀佛の御言葉で「唯除」以下は釈尊がつけ加へて仰せられて

ある。それでこれを釈尊の抑止、おさへとどめであると申して居られます。阿彌陀佛は如何なる衆生も生れさせたいと願はれてゐるが、釈尊がかう云ふ悪いことが世に現れることはいけないことである、世に現れぬやうにしたいと釈尊が予めそこに落ち入らぬやうにと抑へ止める心からこれを加へられたのであると、昔の講者は説かれて居ります。そこで私として考へさせられるのであります。釈尊は御自身がこの阿彌陀佛といふ広大な母胎につつま込まれて、その前に帰依して居られる心持を大經にひらき、それを教へられてゐる。その釈尊は「光顔巍巍」としてひかりかがやき、全身心によろこびがあふれて居られる御姿である。しかしその釈尊の光顔巍巍たる御姿の中には、如何なる衆生が一番問題になるかと申しますと、悲化段、五惡段に説かれてゐるやうな、この人生の如何にも何ともいへぬ罪障が生命の問題となつてゐるのであります。この世に五逆の罪を犯すものがあれば、釈尊自身の切ない問題としてお感じになる、この世に五逆の罪を犯すもののある限り釈尊が御自身のそれと感じておいでになる。さうしたところから「唯除」のお言葉が出て参るのであります。光顔巍巍たる釈尊の御生命の中に切なる問題が根本の問題として釈尊の心持の中に存するのであります。それが四十八願の中心である十八願にふれて現れて來てゐるのであります。

あゆみの跡

道心の中に衣食ありといへばとて、道心者は必ずしも衣食に富裕なるものにあらず。いはゆる道心の中に衣食ありとは、道心即ち衣食なりとする意味なり、依て道心の外に衣食ありと思ふべからず、是くの如きの觀に安住すれば、たとひ餓死すといへども、是れ道心の食を失はざれば、永遠に自然飽足なり。またたとひ凍死すといへども是れ道心の衣を纏ふなれば、永遠に應報妙服なり、苟も道を修めんと欲する人は、道俗を問はず、この信念こそ詮要なり。

○
今の世の我等の書を読むの心底は、大概この經典を読みこの聖教を誦し、直ちにこれを以て人を教化せばや、人に法話せばやなどのあさましき心底なり。

尊き經典、聖教を誦誦しながら上滑りしておのれの身に修めず、然らばそれが眞に世のため人のためになるかといへば、元来野鄙なところより起れることなれば、己れの身に修めざると同時に、世にも人にも何等の得分なし。いはゆる惡銭身につかず惡徳身をけがすといふ如きのみにあらずして、更に人にまで損分を加へるに至る、留意せざるべ

私共から申せば、釈尊がかう仰せになることによつて私共が始めて如何にも自分は五逆の徒であると自分の姿がしられて來るのであります。我々は五逆や謗法の罪を犯してゐるにしても、さうじやと仲々感じてゐないのであります。親を殺すといふ問題でも、親を刃物で子が殺すといふ表面だけのことでなしに、それよりもつと深い問題であります。自分としては相當に親に尽した心算である、それが実は親の心を八つ割きにしてゐたのであります。私共の若い時に無自覺でやつたことが、親の心をさんざんに切り割いたことをあとで思ひつきます。斯様に五逆の重い罪を犯しながらそれをそれと感じてゐないのが私であります。

誹謗もさうでありまして、釈尊がこの言葉を加へられてゐることによつて始めて私は五逆、誹謗の者かと目をさまされてまゐりますと、五逆と誹謗の姿が自分の身の上のことと感ずるやうになつて來ます。この釈尊のお言葉がつけ加へられることによつて、十八願がすなほにうけとられるこれが私自身の十八願を身にうける心持であります。

次に第十九、第二十の願、所謂三願転入の問題になつてまゐりますが、その他の願とともに、この次にお話させて頂きたいと思ふのであります。

以下 次号

白杵祖山

からず。

○
読書の詮要としての一端には、成るべく一時的領解し得ざるものを入念に読むべし。十度、百度、また千度も読み去り読み来る間に、たとひその義理の一々は領解し得ずとするも、その書の内容は自然に我等の心根に徳化を与へ徳香を薫じ、その人格の崇高なるに至らしむるもの必然なり。読誦百遍意おのづから通ずるの力を發揮するに至るの道理なり。

○
この教養ありて始めて一々の言下声上に領解し得らるるものなるを知るべし。

盛徳の人は惡衣素食の上に恩恵と犠牲の偉大なるを感ず況んや錦衣美食の上に恩恵を忘却するものあらんや。

敗徳の人は錦衣美食の上に知足安分の量為を知らず、況んや惡衣素食の上に恩恵と犠牲の偉大なるを感ずるものあらんや。

自ら敗徳の人にして量為を知らざる身を以て、それを以て世を導き人を化せんなどするもの、その自体すでに世の

冒瀆者であり、人の侮辱者である、教化の洽ねからざる、またむべなる哉。

○ 盛徳の人は自ら惡衣素食に対して知足安分の量爲を守れり、故に身を処すること濃厚忠実なり。

敗徳の人は自ら錦衣美食に対して恩惠犠牲の偉大を知らず、故に身を処すること虚飾輕率にして人に対すること傲慢侮蔑なり。

○ 懺悔とは口頭の詭弁でもない。また筆端の虚文でもない。即ち我等各自の犯せる罪惡の、如來清淨の明鏡に照映せられたる瞬間、內的眞面目の發露である。

これ若し身上外觀に現はれては三品の懺悔、即ち総身熱し、血涙を流し、総身流血となるであらう。されどそれも懺悔の眞意義ではあるまい。より以上、内觀的心血を流すものあるを知らねばならぬ。要するに内觀に秘して外見すべきでない。然るをこれを口頭の詭弁に弄し、筆端の虚文に売る、斯くの如きをこそ、むしろ懺悔すべきではあるまいか。可慚、可愧。

○ 洗濯しながら独り感ずることである。それは身に附着す

しとの理想は滿腔に候ひしも、今は眞に是れ、絶學、無爲の野人に候。捨鉢の投げ遣りにてはなく、及ばざることの眞実に候。

○ かくの如き世に、無用の贅物なるものをもなほかつ哀愁して棄捨したまはずして、此にこの瘦身を委すべく、居を賜ひ、住を賜ひ、しかのみならず、切に永住を勧め、慰慰に供養を施され候御人、否如來の御慈悲の眞に有難く尊くその余りに寛洪なるに却つて慚愧に堪えざる程に候。

世に益なき者、用なき者を是れ程までも親しみ、愛しみ下され候かと思へば、鬼の眼にも亦た一滴の涙潜然たるを覺へ候。

水崎の天地、修養の道場を辭し候時、すでに小生の身は灰燼と化し、心は死滅と成り申し候。とても如來慈悲の懷抱中ならでは再生地なく、また復活場なく候。ただこの慈悲の懷抱のみこそ、小生の希望、意義、慚愧の出所にしてまた入所に候。

○ 思ふに病は養ふべきものにして、恐るべきものにあらす親しむべきものにして疎んずべきものにてはこれなく候。

「養」と「親」とは病を消し候。

ることの親しく近きものほど、垢に染むことの深くして厚い理である。

○ 佛陀は「六賊内にあり、煩惱心を穢す」と覺醒を与へられた。然るに我等の習として、内の賊を修むることをなさずして、ただ外に仇を追ふことのみに勞するのである、あやまれるも甚だし。内賊を修め得ば、外敵は追はざるも自然に帰順すべきである。

○ 「身から出た錆」といふ諺がある。「汝より出て汝に歸る」といふ教がある。

本當に垢は身から出て身を穢す。罪は心から出て心を縛る。天地広しと雖も、我が一身におさまらざるなく、萬物多しと雖も、我が一心に入らざるなし。故に一身清淨なれば、天地また清淨なり。一心洞豁なれば萬物自ら洞豁である。

○ 身の垢、衣の穢は、人これを洗ひ除かんことを欲するは好し、されど心の罪垢に至りては、ただ隠蔽して顯はさず、表面の虚飾に、雜毒虚仮の善行をてらうて、その内面の事實のあらはれないことを恐るるの余り、いよいよ虚飾の増上を事とするものである。可悲、可悲。

○ 曾ては驢尾に附してなりとも靈的に活き、靈的に動き度

「恐」と「疎」とは病を長じ候。

○ 如何なるか療養親愛の第一法とならば、病即是、療養親愛の第一法に候。則ち病中は病氣三昧に入ること候。決して決して身体と病氣との中間に健康てふ魔物を、また勉強てふ狂物を浸入せしむる間隙なき様になり候こそ肝要に候。体病一体の不二門に安住し候こそ病氣三昧の大寂定と申し候。

若しも健康・勉強等の魔物狂物を侵入せしめ候はば、それこそ由々敷一大事にして、呉れぐれにもその辺の御用心肝要に候。

○ 眞の佛法は出家の行道者よりも、むしろ在家の求道者に於てこれを信譽し體驗せらるるといふ意味を、出家行道の比丘の口から説き述べられてゐる。さう云ふ自覺が大切なことである。

○ 「普濟諸貧苦」とあるのは精神的であることはもとよりであるが、又た一面には物質的救済をも事実には誓はれたることを思はざるを得ず、それは殊に自分にとりて一層その感慨の切実なるものあり。

○ 「不知」の教化こそ眞の教化なれ、「不識」の自覚こそ眞の自覚なるべし。

豊前の築上郡に仁平同行あり。常念佛の行者であつたが「聞ききらん、聞ききらん、聞きかけたままじや」と八十の老人が常に語つてゐた。釈尊の「百千萬劫するも窮尽すあたはず」の仰せと同味である。

○ 年を送り歳を迎へても、また風につけ雨につけても、尊まれ候はただ佛恩のみに御座候。

世の中のことは、苦は苦にからめられて、ますます苦に沈み、楽は楽にしばられて、いよいよ楽に耽り、苦楽ともに我が身心を繋縛いたし候。萬事はみなみなこのならひに候。

然るにただ独り、如来の御慈悲のみ、世の盛衰榮枯、人の苦楽昇沈、何につけても尊く道味いたされ候。

○ 苦をすてて後に出て来る楽に候へば、その苦を捨つることに不可能なる我等は、いかで楽といふことの眞実に味はれ申すべき、とてもとても覺束なき儀に御座候。苦をその

ままだ捨てずして、一切を攝取したまへる御慈悲のほど尊重に候。

○ 正も偏すれ僻となり、邪も通すれば中となる、吾の執なきを要となす。吾等の執封を離れたる正は、古今を論ぜず通ぜざることなく、東西を問はず、達せざることなし。古に居して今に通じ、今に在りて古に達す。東にありて西に通じ、西に居して東に達す。正中の道は古今を超へ東西を絶す。

○ 古今東西は、時代の変遷あり、思想の変化あり、知識の明昧あり、理想の高下あり、人種の相違あり、これ等の一切を貫通して、しかも融会するものは中正普偏の一道なり。

八萬四千煩惱魔 八萬四千煩惱の魔
生涯行路是修羅 生涯の行路は修羅なり
翻思何処維安宅 翻つて思ふ何処かこれ安宅
唯有無量壽佛陀 唯有無量壽佛陀まします

昭和七年十月五日華甲雜詩之一 祖山

波岡茂輝氏 詠草

み佛のめぐみたたへん人しあらば七つの宝に代へむと思ふ

ちゝちゝと鳴くよりほかにすべしらぬ小鳥をかひていとほしみけり

一しきり朝アサ毎香ニホを供へたる彌陀をこのごろをろがみまつらす

みほとけに香をささけて久々に別れし吾にあへる心地す

何ものも載せてすてざる地の如くそむける人をわれもゆるさな

來し方の我が足跡を思ほへは行手の事もおほかたはしる

編集後記

秋も更けて行きます。サンマに松茸。柿栗梨と店頭は秋の味覚を盛り上げて居りますが、本年は山の幸が缺乏して熊が人畜をおそうことが瀬々として報ぜられます。さて人間社会の不作はこれから一年を通じてどう解決せられることとせうか。我等の心の奥深く姿をひそめてゐる熊が、修羅の如く荒れ狂ふこととせうか。衣食足りて礼節を知り、脊に腹はかへられぬと昔から申しますが、それにつけても、「汝一心正念にして、直ちに來れ、我よく汝を護らん。すべて水火の難に墮することをおそれざれ」との、西岸上の人、彌陀招喚の德音ひとつが力であり光であり救ひであります。そこに私共の煩惱の全体が慈光に照され、おさめられ、とかかれて、四五寸の白道がひらかれるのであります。

たのまるるただ念佛のわれにありさるべき業はさもあらばあれ

池山先生詠

碍りなくすべてを照す御光はさはりある身の上にこそ照る

臼杵先生詠

大経講話は四十八願中、聖人が大切に信証せられた願について詳しく福島先生の道味を頼つて下さいました。ことに第十八願について今回は解説して下さいました。文面は十九、廿の願と共に「三願転入」を道味して頂けることであります。御住所は横須賀市船越三の三七であります。

△あゆみの跡は、臼杵老師の信響、道味であります。去る十月十日福島先生が老師の病床遺稿を御持参下さいました。老師が昭和二十三年三月に陽癌であると診断せられ、其上に先づよく持つて向ふ一年間、若しくはそれ程保たれないかも知れないと宣告せられ、爾來數月間の御遺稿集を頂きました。次回に記載させて頂き信徳に浴させて頂きます。

△近角先生随聞私記は、常音先生から折にふれ時に触れて御聞かせ頂いた私の記録であります。先生居まさぬ今日、御補正願ふ方もありませんが、聞き間違つて居ることがありましたらどうか御叱責下さいますやうに、文責は皆私にあります私の領解でありますことをお含み願ひます。

なほ常音先生の御法語で種々と耳の底に残られるかたがありましたら、私共に御頼ち下さいますやう、御願ひいたします。常観先生の御病氣中のことやら、文常様の歿死された時の父君としての常観先生の御心算など、作らさぬし、明けて放しに常音先生が御語り下さいまして、そこに飽くまでも「凡夫往生の道」を告げ知らしめて下されたことであります。

私共は油断するとすぐ自分の信賴し尊敬する先生を偶像視して喜ぶといふことになり勝であります。常観先生が日本全國を巡錫されることをおやめになつた原因の一つは、各地に「今親鸞來る」といふ風に祭り上ける傾向が熾んになつたことであると承つて居ります。偉い人、賢い人、すぐれた人が往生出來るのであれば、さうでない者は皆救済から洩れるのであります。

凡夫往生の白道はひとへに彌陀佛の誓願の不思議に存する。そこひとつを先生は御身にかけて道味して下さいました。

昭和二十八年十一月十日印刷

昭和二十八年十一月十五日発行

毎月一回十五日発行

一部 十七回(郵税共)
定価 半年 百四(郵税共)
一年分 二百四(郵税共)

名古屋市千種区千種町馬走二八

編集兼 花田 正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 富田 隆

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千種印刷所

名古屋市南区駄上町二ノ二八

一 道 会館
発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番